接茶茶間

第40号
H22.6月

発行人　医療法人社団
すんとおる
沼津市高沢町6-1
TEL.055-922-8855
URL.http://www.sunto-seikei.jp

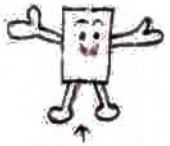
みなさん、こんにちは。梅雨の時期になり、毎日ジメジメな日が続いてますね。でも これが終われば 一気に夏!!
BBQや夏祭り、海やプール☀楽しみはいっぱいですが…暑いのは嫌ですね㊙ 日焼け対策もしましょう↗

さて、今回は院長が関節リウマチについてお話してくれます。どうぞ

リウマチ治療の変化

院長　清水

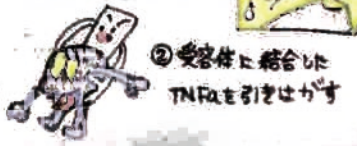
毎年6月の梅雨で鬱陶しい季節は、関節が痛い人が増えるからでしょうか？リウマチ月間ということになっており、全国各地でリウマチに関する講演会が開かれております。そこで駿東新聞でもリウマチに関するお話を、少しばかりおこないましょう。今回は リウマチの治療方法が昔と変わってきた、というお話です。



少し前までは、関節リウマチは有効な治療手段がない、難病の一つでした。病気そのものが慢性の経過をたどるために、治療手段も、効果は薄いかもしれないが副作用の少ない穏やかな薬から使われ始め、病勢が重症化するとともに段々と強い薬（効果が強い薬は副作用も多く発生します）が使われる傾向にありました。この考え方は「Smythのリウマチ治療ピラミッド」として古い教科書には掲載されておりました。

しかし リウマチの骨破壊に着目した最近の研究によると、リウマチの発症初期、特に発症してから最初の2年以内に適切な治療をおこなえば、その後の重症化（すなわち骨破壊・関節破壊）を防ぐことができる、と言われるようになりました。

そこで、リウマチと診断がつき次第、強い薬（効果が科学的に証明されている薬。生物学的製剤など。副作用の発生には注意しなければならない）を、早期から使用することが推奨されるようになりました。リウマチ治療の基本方針が変わってきたのです。「弱い薬から段階的に始める」から「強い薬をすぐ使う」に変わってきたのです。

近年、医学の進歩とともに、炎症性サイトカインに着目した新しい薬：リウマチ生物学的製剤が開発され、一般的な保険診療でも使われるようになりました。また、新しい検査方法（抗シトルリン化ペプチド抗体測定や、抗ガラクトース欠損IgG抗体測定など）が開発され、早期からリウマチの診断が可能になりました。新しい診断基準（厚労省早期関節リウマチ診断基準1995年）も策定され、世の流れは関節リウマチの早期発見、早期治療にシフトしてきています。

関節が痛みだし、何かおかしいと感じたら、早めにリウマチ専門医に相談することをお勧めします。